

宗教間対話時代のキリスト教大学

—キリスト教科目と建学の精神—

森 真 弓

目 次

1. 政治と宗教の分離
2. 大学の理念
3. キリスト教大学の建学の精神
4. 伝道か？ 学問か？
5. 建学の精神とチャペルの礼拝
6. キリスト教科目の構想と方法論
 - (1) 「キリスト教の歴史」
 - (2) 「聖書の世界」
 - (3) 少人数の授業「講読」、そして結論

立教学院の重職を歴任した日本聖公会司祭の塚田理氏は、一般にいう「キリスト教主義学校」に代わる「キリスト教学校」の呼称を提唱し、「主義」というイデオロギーとは異なる、定立化・固定化されない信仰（理念）がキリスト教学校の要だと説く。戦時下の軍事政府が強制したチャペル閉鎖やカリキュラムからのキリスト教科目の抹殺に、どう立教学院のクリスチャンが対処したか、しなかったかという負の経験を踏まえ、国家からの学問の自由や中立性を保つためにこそ、キリスト教学校が果たす使命があるという⁽¹⁾。

この歴史的な視点は重要なので、私もまず北星学園大学をキリスト教大学と呼びたい。キリスト教大学にとってキリスト教は大学の理念とアイデンティティに関わる。しかしまたその理念は個人的なアイデンティティと深くつながる。私は自分の個人的な信仰（理念）が私を育て、教室で出会う学生たちが支えてくれたと感じる。この偉大な力、私、学生という関係の深まりを省察するのは、4年の契

約を全うする私のチャプレン生活の締めくくりにしてふさわしい。私はこれを書きながら、日本社会にはキリスト教理念が必要なのだという予期しなかった希望が見えて驚く。全体主義国家に迫害されたクリスチャンや第二次大戦下の教会の研究が、日本人であってクリスチャンだという私のアイデンティティを煩わしてきた。後に国際的な環境で聖書の伝統自体の女に対する抑圧を研究し、サバイバーとしての新しい自分を見出した。2003年に私は英国に移り霊的な回復のプログラムの実践と研究に専念するが、北星で学んだことが私を祝福し送り出してくれている気がする。祖国である日本で私が神と自分のために果たすべき重要な課題を終えた爽快感と感謝がある。

北星では、文部省で教師として承認された私が提供する知識と経験を、学生たちが受け留め自分で考え積極的に応答した。一方通行でない教室での対話のなかに、国家や大学や教師や学生という、人間が定めた枠を破る偉大な力が働いていた。この論文ではキリスト教大学の理念や建学の精神を、観念的な側面だけではなく、教室の実践から得たものとして、私自身のアイデンティティ模索の視点で考察する。

1. 政治と宗教の分離

西洋との競争が動機だった日本の近代化は、祭政一致という民族的な伝統のなかで、宗教を政治の「下に」位置付けることによって、ヨーロッパが通ってきた政教分離⁽²⁾の世俗化の

プロセスをなぞってきた。いわゆる「キリスト教界」 Christendom が長い世紀をかけて格闘してきた政治と宗教の関係の問題に、天皇制を悪用した独裁的国家の呪縛を第二次大戦で経験した日本社会が、初めて取り組んだのだ。政治と宗教は完全に分離したり敵対することはできない。キリスト教界は多くの歴史的失敗を重ねながら、自らのキリスト教を絶対化せず、信教の自由を認めつつ政治を「超える」宗教の理念を掲げ、政治と宗教が干渉しない関係を求めてきた。これが「キリスト教後」 Post Christianity と言われる、現代の国際社会における基本的な協調理念なのである。

つまり皇室を持つ点で日本が模範とした英国では(女)王がクリスチャンなのだ。毎年クリスマス日午後3時には国民へのメッセージがテレビとラジオで放送されるが、彼女が一信仰者として語っていることが伝わってくる。自分が女王であるのは英国の歴史的・精神的な遺産と伝統に従い、人として神を信じることにおけるの使命なので、彼女には個人的な信仰を証し、神を讃美し国民への祝福を神に祈ることが期待される。また女王の言葉のなかには他宗教の人々へのメッセージが必ずある。自分がクリスチャンであるというアイデンティティを明確にしなが、しかし英国に住む多民族・多宗教の人々にも、英国国教会の系統に属する世界各地にある聖公会の人々へと同様、神の祝福を祈り共存を呼びかける。つまり、英国は宗教改革と市民革命の歴史的遺産をこのような皇室の形で継承している。これは塚田氏が説明しているように、聖公会の「国家教会から国民教会への脱皮」であろう。⁽⁵⁾ 教会は国家のためではなく、人民のためにあるという考え方である。もちろん、皇室に対する批判もあり問題もある。しかし、ともかくも英国では政教分離と民主主義が皇室と共存する形をとる。国民教会をアイデンティティとして明確に表明しながら、他宗教を認めるのだ。それは例えば教育におても具

体的に現われ、娘がロンドンの英国国教会の小学校に通っていたとき、ユダヤ教やカトリックの小学校も存在していることを知った。その子たちも英国の高等教育制度に合流できる。(日本では義務教育として脱宗教化した文部省の学校のみが正規で、他の民族学校は高等教育とはつながらず、宗教「主義」の私立学校は文部省の指導と検閲のなかにある。) また私が留学中に履修したロンドンのキングズ・カレッジでの集中語学コースでは、イスラム教徒の学生たちに金曜日の祈りの部屋が与えられていた。200万人いるといわれる英国のイスラム教徒に、このような具体的な形で信教の自由が奨励されているのかと印象に残ったものだ。

これはアメリカ合衆国でも言えることで、私がサンフランシスコにいたとき、合同メソジスト教会のクリスチャンである前クリントン大統領は、他宗教の祭日に祝いのメッセージを贈っていた。これはポスト・クリスチアニティの精神が民主主義のなかに着定していた一例だった。これが多民族・多宗教の共存社会の政教分離なのだと私は肌で感じられた。

ちなみにアメリカで1998年に広島原爆投下日を経験した私の心情を分かち合いたい。私は本当に腹が立った。日本ではだれでも知っていて未だに重苦しく覚える8月6日なのに、加害者張本人がだれも話題にしていなかった。私はサンフランシスコの坂を悠々と走るバスに揺られながら、心のなかで「アメリカ人」に悪態をついた。「何て自己中心的・小市民的なんだ、歴史観の欠如もはなはだしい」と、怒りに満ちた目で私はバスのなかを見まわし、ハッと気づいた。サンフランシスコではいつもどこへ行っても人種が入り乱れていた。民族人口の大部分が中南米で500年前に抹殺されたヒスパニック系、400年前からの奴隷制構造に未だに抑圧されるアフリカ系、英国の植民地だった中国系やインド系、その他ユダヤ系、ロシア系、中東系、東南アジア系、韓

国系、日系など、実に多民族が共存する都市なのだ。この人たちもアメリカ人なのであって、原爆を投下したという、日本人が描く一辺倒な白人アメリカ人のイメージとは合わない。このような多人種の人たちが日本に原子爆弾を落としたとは私には思えなかった。「アメリカ」と思ってきたイメージが実は政治的なもので、生身の人間とはつながらないと分かったとき、歴史観というものは単に過去の過失に謝罪することではなく、そこから学んで社会の変革を志向し実践する、現時点の視点であることに思いが至った。原爆の日は過去の過ちを責めたり謝ったりする日ではなく、学んだ真理に基づく理念を形成し、それを実行する希望に燃える日である。その一つの有力な答えが、サンフランシスコやロンドンやニューヨークという多民族・多宗教のコスモポリタン（世界市民）都市なのだ。異なる人々が共に住むなら一つだけの価値観は通用しない。これはたとえアメリカという現在の国家が滅びても、次の新世界に継承されて行くだろう。あのローマ帝国が滅びたときにこそキリスト教が世界中に広まったように。実践上の過失は常にあるだろうが、コスモポリタン都市という平和的共存形態が真理だと証明され広がる日が必ず来よう。いや、すでにもう来ている。サンフランシスコのバスのなかで怒りに代わって喜びが湧いてきたのは、多人種の乗客たちと同じようなコスモポリタンである私を自覚したからだ。当時私は神学院の卒業式で非常に励まされ、日本には帰らずサンフランシスコで仕事を探そうとしていた。実際はその後すぐ北星学院大学に職を得、また来年からは英国に移住する。しかもイギリス人のよい伴侶を得て。私の祈りは私の心を私よりもよく知っている神に修正され実現している。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えられて与えられる」ことは私にとって常に真実であった。これは私をいつも自分を

超える理念に結びつけ、私の心が本当に望むアイデンティティに目覚めさせてくれる。

日本の話に戻ろう。象徴天皇は神道の信仰者なのだろうか。神道は言葉の信条を持たない。仏教には説法があるが、神道は儀式だけで構成される。天皇は祭司か信仰の対象かが曖昧で、ましてや天皇の思想や信仰表明などは期待もされない。もし天皇が自分の思想を語ればどうなるのだろう。それこそ天皇の人間宣言だと思うが、社会の期待は皇室家族の結婚や死や子の誕生そのもののニュースにあり、宮内庁の秘密主義に基づく厳しいコントロールのなかで、「日本人」という情緒的な一体感を煽る形でメディア化される。「皇室アルバム」的なこの印象操作が封建時代の曖昧模糊とした宗教的な雰囲気を作る。英国では女王も毎年長者番付に載り、多大な税金を払う市民的な義務を果たすが、日本の皇室が税金を払うなど聞いたこともない。

神道の思想的発展を怠り、皇室の人権問題に気づかない日本社会がとる、宗教と国家の分離の未熟さが指摘されよう。大日本帝国憲法（1889年）以来、神道の国教化が失敗してきた歴史がある。神道を宗教として体系化できなかった明治政府は、教育勅語（1890年）を軸にした天皇制教育を代替物として「神道は宗教ではない」と位置付けた。1899年には私立学校での宗教教育と宗教儀式を禁止し、教育における仏教やキリスト教を排除した。⁽¹⁰⁾ いわばこれで祭政一致に変わる脱宗教の新理念を建てたつもりであったろうが、実は神道を宗教ではない宗教として空洞化する結果となり、皮肉にもこれが軍国主義政府の国家神道の理念となったのである。この空虚が清算されずに現在も残っていて、戦後も文部省が復活させた宗教教育から神道が除かれている。神道は未だに宗教ではないのだ。これが日本人の宗教理解にも広く反映していて、例えば初詣として圧倒的 majority が寺社に参るので、これを見た外国人は日本人の宗教は神道か仏

教だと思うが、日本人自身は自分たちを無宗教だと言う。「富国強兵」「脱亜入欧」の軍国主義政府の方針を思想的に支える「和魂洋才」が、形としての儀式はいいが信仰心はいらないとする近代化のプロセスの生き残り理念として未だに生きている。和魂は宗教的に空洞なので軍国主義的なスローガンを言葉化できず、思想的に外の世界と対話しない。熱心に西洋の実用技術を取り入れながら、日本人のことは日本人にしかわからないとか、日本には日本のやり方があるという、説明しないプライドを蓄積した。これは自分を表現するのが苦手な日本人のコミュニケーション障害となっている。考えを適切に論じられず、世界での自分の位置がわからず、現実と歴史を否認する日本人像が浮かび上がる。

私はヨーロッパ、インド、東南アジア、中米などに研究旅行をする機会があり、日本社会の産物である自分を痛いほど経験した⁽¹¹⁾。貧しい国々を歩いて、日本人である私がいわゆる第三世界を搾取する第一世界、つまり西洋陣営に属することを認めざるを得なかった。それは苦しい自覚ではあったが、そのとき私は西洋と競争して勝とうとする「和魂洋才」の開国理念が強いてきたコンプレックスから解放された。私は「白人」を自分と同じ人間と見、対等に友好的に話せるようになった。西洋人が持つ歴史的罪悪感に共感でき、共に覇権主義的な過去を埋め合わせる働きができるという連帯感が持てた。それと同時に私は他のどんな民族に属する人たちとも罪悪感なしに話せるようになった。個人は民族や国家の違いを超える。顔の見える出会いの方が、歴史が形成してきた文化や宗教の固定的な違いよりも、根本的で未来志向的・流動的な出来事なのだ。このような私の個人の価値の発見は、日本人に蔓延した不確かなアイデンティティから来る思想的・心理的コミュニケーション障害からの癒しだと自覚する。自分はだれかという歴史的なアイデンティティは、過ち

を恐れず対話を求めて自分が踏み出すことによって形成される。それは自分を分かち合いたいという情熱と、相手から学ぼうとする謙虚さから生まれる。そのようなアイデンティティ模索の経験は、思想的であると共に霊的な事柄なのである。

2. 大学の理念

神道が宗教ではないという倒錯を基礎にしてきた近代の天皇制が、無自覚な宗教性を社会的に形成し、祭政一致という封建時代の宗教と政治の関係からの脱皮を困難にしている。これを踏まえながら大学の理念を探るために、まず大学そのものの歴史を概観しよう。大学 Universitas は12世紀のヨーロッパで始まったというよりは自然に発生したもので、学問に携わる人たちの自治体として自宅や教会に集まって講義を聴いたことに端を発する⁽¹²⁾。まさに北星学園の創立がクララ・スミス宣教師の私塾から始まったことと重なる⁽¹³⁾。キリスト教もまた紀元1世紀に個人の家⁽¹³⁾の2階から始まった。国家に対して個人という価値を重要視する理念がキリスト教会に伝統的に存在するなかで大学が生まれたのだ。13世紀にはヨーロッパの全大学が教会制度に組み入れられた。これはキリスト教界の縛りではなく、むしろ「一つの大学で教授になればその教授はどこかの大学でも教えることができ、また学生における学位もどこの大学でも取れる⁽¹⁴⁾」という、地域性からの脱却であり、まさに大学が教会制度に守られて国境を超えるユニバーサルな広場に解放された現象である。そして16世紀の宗教改革は神学の権威を高めた。聖書を世俗の言葉に翻訳したのも画期的だが、印刷術の発明が聖書を教会の礼拝以外のところで、万人が読み研究できるものとしたことが決定的だった。そしてキリスト教の理念や信仰は、時代を越え文化的な形態を変えつつも、国家が滅びても続いて来た。このように

宗教というものには政治を超える世界性、普遍性と継続性がある。

ヨーロッパの世俗化の波のなかで19世紀のベルリン大学が新時代を切り開き、神学に代わって学問を全体的に把握する哲学が重んじられた。それがリベラル・アーツの理念⁽¹⁵⁾となる⁽¹⁶⁾。しかし、ドイツにおいては学問の中央集権化が進み、哲学の習得も専門分野における技法の能率的上達の下に置かれ、専門科目が結局優先されてしまった。戦前の日本の大学はこのドイツのモデルに習った。⁽¹⁷⁾

戦後の日本の新制大学はアメリカを模範とした。アメリカの大学は1636年のハーヴァードが最初で、牧師養成カレッジとしての出発だった。イギリスのオックスフォード・ケンブリッジを模倣しながら、アメリカでは各宗派が宗教色の強いカレッジを作った。19世紀後半の産業革命で実務的・技術的な教育の必要性が噴出し、大衆的な州立大学の時代に入る。大学は人生観・世界観抜きの職業準備訓練学校の様相を呈し、ただ卒業証書を得るため、またクラブ活動を楽しむために学生が大学へ行った。そのような傾向を正したのがコロンビア大学から始まった、よき市民の育成をめざす一般教育の重視⁽¹⁸⁾だった。

こう見てくるとリベラル・アーツを軽視するたびに大学が歴史的に混迷している。したがって私たちがこのような過失から学ぶならば、一般教養科目重視が大学改革につながろう。

日本の大学の場合、戦前戦後を通じ政府主導の国立大学をピラミッドの頂点とする教育環境のなかで、私立大学がいわばリベラル・アーツの理念を守ってきた。そして、大学は何のためにあり学生は何のために学ぶのかという実用にとらわれない哲学的な学問の自由・自治の理念は、特にキリスト教大学がキリスト教科目を教えることで担えたはずだった。しかしその意識はまだ確立せず、キリスト教者たちも巨大な国家の圧力の下に大学共同体

の自治の精神を主張できなかった。未だに日本の人口の1パーセントしかいない、社会の少数者であるキリスト教者にとっては荷が重過ぎること⁽¹⁹⁾だったろう。

今また少子化現象と文部省の干渉力強化のなかで、私立大学の理念や自治能力が揺らいでいる。それは塚田氏が日本の大学ではリベラル・アーツがやはり失敗していると指摘することと重なる。学ぶ理念の探求を助ける教養科目よりも、結局社会に役立つ人を作る実学、即ち専門科目の偏重により、国家が期待する人材養成を優先する意識から抜けきれない。戦前のように大学の自由と自治を軽んじる傾向が今再び台頭している。大学がリベラル・アーツを否定したとき、「国民に対してどのような宗教、哲学、倫理、思想、理念を持つべきかを統制する権利は国家にあるとしたのである。そして、日本の学校教育行政は、天皇制絶対主義体制の下におかれた日本の近代化路線のレールの上に乗せられること⁽²¹⁾になった。」そして塚田氏はこれが戦時中の思想統制のなかの例外なのではなく、戦後も学校が文部省の教科書検定や行政指導、設置基準の統制等によって、戦前と代わらない体制を続かせてきたことを強調する。だから私立大学が打ち出せるはずの自由なカラーも、カリキュラムに発揮できる独自性も未だに生かされて⁽²²⁾はいない。

したがって今は経営の危機などではなく、思想の危機であろう。生き残りのために独自性を犠牲にした大学の自己破壊的な歴史を繰り返さないために、キリスト教大学においてキリスト教科目がリベラル・アーツの理念に貢献するものとして見直される必要がある。

3. キリスト教大学の建学の精神

キリスト教科目の歴史的な貢献を考えると、聖学院理事長の大木英夫氏が論じる21世紀の教育理念として「宇魂和才」の説⁽²³⁾が重要

である。日本の近代化の理念としての「和魂洋才」は「霊的次元の欠落」であり、西洋技術は受け容れるが思想は日本製で行くという倒錯であって、第二次世界大戦の敗戦でこれが立ち行かないことが証明されたと大木氏は言う。それなのにその「文化形勢理念の破滅」をいつまでも否認する日本の社会の頑迷さが問題なのである。別の方法でこれをうまくやれば成功するのではないかと、現実を認めず未だに同じ失敗を重ねる。「日本近代の外面の崩壊」と「内面の崩壊」をいつまでも否認する態度が、日本人のアイデンティティの不確かさを招いている。和魂洋才の理念自体が倒錯であったことを謙虚に認め、それに代わる理念を建てる必要がある。

大木氏が提唱する「宇魂和才」は、ユニバーサルな思想に日本人の技術をもって当たるといふ、和魂洋才とは逆の方向性を持つ。「宇」宙のスピリットを掲げ、日本人の「才」能でそれを実践するというこの理念、宇魂和才を説明して大木氏は次のように述べる。

「外来文化に対して学習的であり、それを単に模倣するというよりは、選択的（エレクトリックという言葉は折衷というよりは選択的の意味）であり、そして改良的であります。このことは、クリエイティブということと比して、決して卑下すべき能力だとは言えないのであります。それは、学問それ自体が自己目的ではなく、世界の平和と人類の福祉という目的をめざして選択されそれに役立つような仕方で利用されるということ...」⁽²⁴⁾ であると。

大学の教育理念として、知識が倫理や政策と結びつく必要がある。西洋の真似をしてきたという劣等感からの脱却が新しいアイデンティティの形成には必要で、そのためにはすでにある思想を学習的・選択的に折衷できる能力に自信を持つようこの理念は勧める。

これは私が教室で、日本人は宗教的に節操がないと自己嫌悪する学生に対し、そのよう

な宗教観を肯定的に受け取り直すよう励ますことと似ている。教室で私が日曜日の歴史を語ると、学生たちは驚きと戸惑いを隠せない。ユダヤ教やキリスト教の宗教的・歴史的習慣を知らないで踏襲してきたことに、日本人として腹立ちと劣等感を抱いてしまう。では日本人は日本の暦を使うというのが「和魂洋才」の理念であろう。事実、政府は日本でしか通用しない元号を法制化している。しかし、私は学生たちになぜ日本人が発明したものでなければ気が済まないのかと納得する。ユダヤ教の安息日（土曜日）をキリスト教のイエスの復活日（日曜日）として見直し継承したのはキリスト教の恥ではない。同様に、日本人が近代化のなかで西洋の暦を採用したことも恥じることはあるまい。さらにまた日本人が新年は神道で、結婚式はキリスト教で、葬式は仏教でというふうに宗教を使い分けるのは、日本の宗教の発達に関係することで、なぜそうなのかを歴史的に振り返ることが自己発見につながる。宇魂和才の理念は私の教室で学ぶ学生との対話を深めるのに有効である。

ユダヤ教が歴史的に形成してきた奴隷解放の理念（出エジプト）は、キリスト教がそこから枝分かれしても継承できるものだった。事実キリスト教はこの奴隷解放の理念を学習して新時代の洞察と折衷し、イエスによる霊的な解放、人間の罪からの解放として見直した。それがキリスト教に民族を超えた世界宗教への道を切り開いたのである。世界の精神的遺産は学習・折衷して継承するものであり、各民族が一からやり直す必要はない。前時代の精神的遺産は、どの民族のどの宗教的伝統からも継承できよう。それが開かれた健全な歴史観というものではなからうか。

大学の建学の精神も歴史から学習しつつ、新時代の洞察と折衷しながら継承できるであろう。その歴史を今どう理解するかが、そのときの大学のアイデンティティとなる。それは個人の歴史と国の歴史、世界の歴史と皆つ

ながっていて区別できない。キリスト教科目を学びながら、自分や大学や日本や世界を無視はできない。この科目で学生たちは広い視野から自分自身のアイデンティティの模索ができる。キリスト教の歴史を学びながら、自己を発見する知的な喜びを学生たちは表現する。次は圧倒的の大多数の学生の声を代表する。

「私は今回キリスト教の歴史を受けるまで、キリスト教に対して良いイメージを持っていませんでした。宗教全般に対して持っているイメージも良いものではありませんでした。たぶん私は宗教というものについてほとんど勉強したことがなく、全くといっていいほど宗教に対する知識がなかったことと、ニュースなどで新興宗教などが事件を起こしたりするのを見て知っていたということが宗教に対するイメージが良くない理由ではないかと思います。しかし、今回キリスト教の歴史でいろいろな人達の発表を聞き、森先生のお話を伺っていくうちに、私のキリスト教に対するイメージはかなり変わりました。」(2001年度1年生)

4. 伝道か？ 学問か？

宗教にアレルギーを持ち、実学(受験)能力を身につけ生き残ってきた学生たちが私の教室にやってくる。私はそういう若者たちの思想的成長のプロセスに貢献したいと思いながら授業をする。学ぶ理念なしには大学で意欲的に勉学を進めることは難しいことを、私は教室でひしひしと感じる。学生たちの自信のなさ、受身的な態度、不満や怒り、野心やあせりが、高校卒業後突然手に入れた自由のなかで渦巻いている。一言で言えば若者たちはあれもこれもやりたいという期待と、結局何も満足に出来ないのではないかという恐れで混乱している。それは何も学生に限ったことではなく、毎年新学期に教壇に立つ私にもある。後で信頼関係を獲得できるとわかって

いても、必修で「宗教」を押し付けられたと反発する学生の反応が攻撃と感じられて怖い。しかし、私は襟を正してその挑戦を真摯に受け留めねばと思う。新しいことに挑戦する正直なぶつかりあいのなかでしか、恐れを克服する霊的なレベルは開けないからである。成長するには痛みが伴うのである。

授業が進むに連れ、キリスト教の歴史や聖書の世界が面白くためになると反応する学生が増える。毎授業で学生たちに課している感想票には若い知識欲と向上心がほとぼしる。それは心を開いて学ぶ人間の尊厳だと思う。人間は学ぶ存在で、そこに価値を見出せば学習する意欲が自然と湧く。積極的な方向へ変わる学生たちを観察するのは私にとっても大きな喜びである。互いに尊敬し楽しみながら、学生と教師が共に学ぶことへと導かれる。

いま学生のこのような勉強意欲を動機づけるキリスト教科目の必修がはずされようとしている。「宗教」の押し付けはいけないという論理、他宗教も教えなければ不公平だという論理が主な理由である。しかし今までにも見てきたように、自分が無宗教だという倒錯に立ちながら、キリスト教が押し付けだというのは説得力がない。「無宗教」だと思ひ込む日本社会の宗教性の自覚とその中身の言葉化が必要である。西洋に学んできた日本社会にとって、キリスト教との対話は精神的な歴史観形成に役立つ。過去にも歴史的には外来宗教であった仏教が、日本にあった民間宗教を神道の思想へと系統立てたはずである⁽²⁵⁾。

それと共に、キリスト教大学であることはキリスト教を礼賛するためではないことも明確にする必要がある。私はクリスチャンとしてキリスト教の歴史の相対化が大切だと思う。それは現代の欧米の大学がもはやそれまで伝統だったキリスト教だけを掲げなくなったことと対応する⁽²⁶⁾。それはキリスト教の後退ではなく、宗教間の対話が必要な時代のキリスト教の在り方である。例えば娘が在学した英国

のサセックス大学では聖公会とカトリックが2人づつ、バプテスト、メソジスト、ユダヤ教、その他の宗教のチャプレンが1人づつ、計8人ものチャプレンがいた。キリスト教が歴史的な失敗から学び、自らを絶対化しないという宗教の開かれたあり方の一つの模索であろう。これを日本が学習・折衷するためには、自分を無宗教とする大部分の人たちに対して、まずキリスト教大学がキリスト教の学びを強化することが必要であろう。そのような地についての歴史観こそが、日本人が宗教と近代化の関係を振り返ることを可能にしよう。

事実、日本では16世紀以来キリスト教徒の迫害によって国際化・民主化を否定してきた過ちの歴史がある。これを私は絶対主義国家の下での思想弾圧と位置付ける。キリスト教だけではなく、国家に反対する思想がすべて弾圧されたのである。これを歴史的に反省するならば、日本の場合はキリスト教大学がキリスト教の明確なアイデンティティを掲げることによって、神道が自らを宗教として位置付け、仏教や他の宗教的な遺産を見直し学ぶという、開かれた宗教的な態度の形成を助けよう。そこにこそ人ではなく人を超えた力に従うという、キリスト教だけではなく他の宗教に共通のアイデンティティが生かされる。人の歴史は過失の歴史である。それを隠しては真理は学べない。学生が系統立てて聖書の思想、歴史、文化を学び、キリスト教の負の歴史とそれを克服してきた歴史の両方を学ぶことは、他の宗教を学ぶことを励まし、他科目との連携と対話を助ける。事実私のクラスには他の宗教に興味を持ったり、自分の専門との関係でキリスト教を調べたいという気持ちになった学生が少なからずいる。

したがってキリスト教はチャプレンにだけ関わる仕事ではなく、またキリスト教科目担当者だけがやればよいことではなく、キリスト教大学の全学的な理念に関わる。北星学園では採用の条件にキリスト教であるか、ま

たはキリスト教に理解があることが明記されている。建学の精神を重んじるという意味で当然のことであろう。しかし、実際の教職員数ではキリスト教は極少なので、例えば学長がキリスト教でなければならないという伝統をはずすべきだと論じるキリスト教がいる。信仰の有無で自分たちが「出世」の優位に立つことに対して、このような謙遜な躊躇が表明されることも自然であろう。どちらの立場を取るにしても、キリスト教大学で目指すキリスト教に関する活動は、キリスト教に改宗させるための伝道活動ではない。大学はキリスト教の数によってチャプレンを雇えるかどうかという、教会が持つ財政的な問題をかかえてはいない。チャペルで礼拝をしてもその活動のために献金を集めたりはしない。チャペルの活動もキリスト教科目も大学では共に教育活動なのである。したがってチャペルでは「福音」を語り、教室では知識を伝えるというような二元論は成り立たない。一人のチャプレンという人間が、右側は信仰、左側は知識というように分けられないのと同じである。和魂洋才の近代日本思想には、その分けられないものを分けようとしてきた倒錯があった。西洋の技術と知識を、その理念や信仰から分けて採り入れようとしたのだ。西洋に勝ちたいという競争心がそのような倒錯を支持してきたことは先にも指摘した。それに反対する健全な理念である宇魂和才は、多民族・多宗教の精神的遺産を分かち合い練り合って、それを学習し日本の状況のなかで折衷した複合的なビジョンとして示し、世界と対話することであった。たった一つの正解を目指すのではなく、一例として宇宙の魂に参加する謙虚さが大事なのだ。したがってここでも伝道か学問かという分離は成り立たず、伝道と学問そのものを広い視野で捕らえ直さなければならない。そのためにもキリスト教に基づく建学の精神は、大学のアイデンティティという観点で見直す必要がある。し

たがって学長がクリスチャンであるべきかどうかより、その学長がどのようなクリスチャンかを問う必要がある。学長がクリスチャンでなくても、どのようにキリスト教を理解し援助する学長かが求められなければならない。

このことに関連して、チャプレンは教員か職員かという位置付けの問題がある。大学が期待する「宗務職員」という曖昧なチャプレン像に悩むなかで、私は「牧会学の専門家」だという明確なアイデンティティを持つに至った。フェミニスト神学専攻の博士号 Doctor of Ministryを得て私はチャプレンに採用された。大学のレベルでこの専門性を認めてくれるのは文部省である。しかし北星ではそれが認められていない感じがいつもしている。チャプレンという呼称が「伝道師・祈祷師」というイメージとあいまって、正規の教員ではないという揶揄が伝わってくる。他方職員からは先生扱われる。教員と職員の区別が明確な環境のなかで、自分の所属が教員か職員かはつきりしないことは精神的苦痛となる。授業に力を入れるチャプレンは教員志向だと批判され、チャペルや儀式執行が本職ではないかという精神的圧迫を感じた。しかし大学の儀式的あり方は、思想は不用、形だけでよいという和魂洋才の理念に添っている。儀式ではキリスト教のチャプレンというよりは「神道の神官」を期待される。プロテスタントの伝統を持つキリスト教では説教が使命の中心にある。入学式や卒業式などの重要な儀式でメッセージを語れないのは、牧師としてのチャプレンの専門性が認められていないことになる。聖書の専門家ではない学長が説教し、チャプレンは司会と祈祷だけをするので、聖書のメッセージを伝えるチャプレンの使命が否定される。したがってチャプレンの専門性を発揮できるのは大学の儀式ではなく、内容に関わるキリスト教科目の授業や個人的な学生相談だと思えるのは必然的である。

大学は文部省にチャプレンを教員として申

請しながら、学校づき牧師でもあるとして職員への「牧会」も期待してきた。しかし現実には他の教員と同じように週に5コマの講義を持ち、100人、200人（昨年275人）のクラスに苦闘している⁽²⁷⁾。学生だけで精一杯というのが私の実際の経験から来たチャプレンの職務観である。むしろ私は職員を立場が違う対等の同僚と見たい。彼らに「教える」位置に私はないと思う。実際、日本の大学では職員と教員の地位の落差が大き過ぎる。ロンドンでもサンフランシスコでも、大学教員も職員も同じサイズの個室（したがった教授たちの個室も小さかった）⁽²⁸⁾で仕事をしていた。大学事務員たちもドアを開けて個室で仕事をする。職務内容は違うが、労務も事務も教員も同じ大学で働く同僚である。彼らはファースト・ネームで呼び合い、序列を意識させなかった。学生と教員の間でさえそのように呼んでいた。人は立場が違っても人間を超える神の前では対等な人間だという理念の実践が大切である。日本の大学には教職員や学生の身分的な溝を埋める大きな課題がある。

5. 建学の精神とチャペルの礼拝

キリスト教大学のキリスト教は、学生が心身共によく学ぶための「奉仕」となる必要がある。それは宇魂、偉大な力、神への奉仕に基づく。イエスもキリスト教の教祖ではなかった。イエスはユダヤ教の教師という社会的な位置から、真に神を信じ人間らしく生きて死んだ人と伝えられる。その生き方の正直さと神との関係の親密さが周りの人に大きな影響を与え、民族や時代を超えても通用するキリスト教の理念を形成してきた。イエスは仕えられるよりも仕えることを説いた。愛されるよりも愛することを、受けるよりも与えることが祝福であることを身を持って示した。イエスの思想の根本は「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失

う者は、かえってそれを⁽²⁹⁾得る」ことにある。この「わたし」という明確な神の子としてのアイデンティティが今もキリスト教の真髄なのだ。この個人の明確なアイデンティティがあるからこそ、自分を与える奉仕ができる。「クリスチャン」はそのようなイエスに従う人たちにつけられた歴史的なニックネームであった。いかなるキリスト教会であっても事業であってもキリスト教学校であっても、もし自己の勢力拡張を目的とすれば、クリスチャンのニックネームにはふさわしくないだろう。

もし大学が拡張することに意義を置くなら、クリスチャンの理念とは両立すまい。自己拡張という倒錯は常に歴史のなかでは自己破壊的であった。キリスト教が建学の精神として意味を成すのは、むしろ小ささに意義を認めるときであろう。まず学生たちに注がれた神の愛を伝えるためには大きい規模ではできない。それは外側から見る建物の規模のことだけではなく、例えば教師一人当りの学生数に質的な焦点が当たろう。キリスト教大学がこれから取るべき方向性は教育の質の向上にある。これから財政的に厳しい時代に入っていく大学に存在価値があるなら、学生がほんとうに神に愛されていると感じるアイデンティティ獲得の援助に、建学の精神が光るときであろう。建学の精神とは学生たちが学ぶ意味を見出し生きる力を得る理念であり、時間を超えて伝達され得る歴史的な遺産である。

北星学園大学は短大部を統合し、付属高校を招き入れ、新学科を創設して拡大したように見えるが、実は規模の縮小である。独立していた短大がなくなり高校が付属化された。大きくなったのは大学だけで、他は消えたり飲み込まれたりしたから全体的には縮小化である。もしこれが大学の価値観で支配する画一化へ進むなら、北星学園の伝統の破壊となり、建学の精神の継承はあるまい。大学こそ謙遜に学園への奉仕の位置に立つ必要がある。そして縮小化の積極的な意味を認めつつ、将

来の学生減少を真摯に覚悟し準備すべきであろう。これからの時代の創造的な実践ビジョンを生む、産みの苦しみが始まっている。多難ではあるが、これを受けて立つことが、真理探求を基礎にした北星学園の成長の道のりとなるに違いない。

新しい理念に生きるために、キリスト教の知識とその思想・信仰とは切り離せない。そのためにはチャペルを重要な教育活動と位置づける必要がある。大学のチャペルでの礼拝はキリスト教会が歴史的に採ってきたコミュニティを目指す。教会では日曜日という、イエス・キリストの復活を記念する日に集まって神をほめる。その死と苦難のプロセスを覚え、イエスのように新しい命を生きようと励まされて自分の場所に帰って行く。そこでは信仰を同じくする友らとの交わりがあり、人間は一人ではなく関係のなかで祝福されて生きる存在であることを体験する。教会は自由参加が原則で、責任感や義務感で出席するようになれば、それは信仰の枯渇として問題となる。学校のチャペルでの礼拝は授業のある週日に行い、毎年学生が入れ替わるので、教育的な配慮が繰り返される。またチャペルの出席もある程度体験義務があってもよいだろう⁽³⁰⁾。私はチャペルではギターと歌を通して心に語りかける。キリスト教は特に音楽文化として人々の生活に深く関わってきたのであり、歴史的に礼拝のなかでそのような芸術を花開かせてきた。これからコミュニティとしてのチャペルをどう創造的に実践するかが課題となる。それはチャペルでの活動が建学の精神に基づく教育活動だという、大学のアイデンティティとしての位置付けと支援なしにはできないであろう。

6. キリスト教科目の構想と方法論

私がこの4年間北星学園大学で担当してきたのは「キリスト教の歴史」「聖書の世界」、

「キリスト教の文化（キリスト教の人間像）」であった。学生は卒業までにこれらから1科目4単位を履修する「選択必修」の形をとる。ここでは私の授業展開の方法論をいわばFD（ファカルティ・ディベロプメント）⁽³¹⁾の一試みとして提示したい。各科目で私が共通に実践していることは、授業ごとに学生に感想票（意見、質問、感想）を提出してもらうことである。この学生の感想票は多人数大教室での対話がある程度可能にし、どのくらい学生が理解したか、何が学ぶ動機づけとなったか、誤解や反発にどう答えるかなど、授業の評価と次の授業準備の重要な参考資料になる。

もう一つ私の科目で共通に実践していることは、学生全員に発表を当てることである。そして学生の評価者（観察者と呼んでいる）を立て、学生が教え評価するという私の役割に参加してもらい、私も聞く側で学生の役割に参加する。これは学生・教師を超えた分かち合いと学び合いであり、研究の共同体である大学本来の姿を目指すものだと考えている。

(1)「キリスト教の歴史」

私はキリスト教の歴史の授業で、学生たちが自分の感性を信頼して歴史を自分で解釈できるようにすることに目標を置く。歴史とは有名な人々がしたことやその年代を覚えることではなく、今ここにいる私たちが作るものだとして学生たちに語りかけ、まずノートのとおり方について次のように提案するのである。

毎時間ノートを取る、その積み重ねがあなたの歴史だ。必ず年月日を入れること、そうでなければ歴史にはならない。歴史は解釈であるから、きょう何を学んだかという自分の解釈を書こう。自分の感想が大事なのだ。感想は学問ではないと軽んじているなら、それは誤解だ。人真似ではなく自分でものを見る自信をつけるのが大学で学ぶ目的である。キリスト教について学ぶこのクラスで起こることすべてが、私たちのキリスト教の歴史なのだ。

だからノートは教師に見せるためではなく、自分のために書くものである。自分のスタイルを見つけ、絵でも表でも描いてよいし、汚い字でもよい。自分に意味があることノートに書くことが最も大切なのである。

多くの学生は私が語るノートの取り方自体に驚きまた共感する。ノートが自分のためだとは思ってもみなかったと言い、また自分の理解したことだけを書けばいいということも初耳のようだ。黒板をコピーする受身でなく、自分の学びの歴史を主体的に作るとういう、この私の呼びかけに多くの学生が安心し、それなりにやる気を起こすのである。

今年度は230人のクラスだが、思い切って全員に発表を当てた。何でもキリスト教に関することならテーマにしてよい。本で自分で調べ5分で発表する。各発表者には「観察者」をつけて、当日学生の発表のフォローしてもらおう。そうすると1回の授業で20人近くの学生が、入れ替わり立ち代り大教室の教壇に立つことになる。その合間に私がコメントするという忙しい授業であるが、これが非常に面白い。それぞれが自分の知りたいことをよく調べて発表し聴衆もよく聞くので、私が講義をし学生が聞くだけの一方通行とは違った雰囲気になる。量的な知識も増え、主体的に積極的に調べて発表した学生の意欲が伝染し、回を重ねるごとに授業が充実してくる。大人数の前で発表するのだからと、学生は本当によく調べてくるので、発表力が質的にみるみる向上する。それを「自分たちは成長している」と喜ぶ学生たちの感想票を私がクラスで読み上げる。自分の成績よりも全体的なクラスの成長を、このように積極的に見ることが出来る学生たちを私は本当に誇りに思う。

私の役目はスポーツで言えばコーチのようなもので、学生を励ますこと、専門的な訂正や追加情報やそのテーマへの学問的なコメントを与えることである。私も毎回短い読み物を用意して行く。時には私の経験も交え時事

問題にも意見を言う。だから感想表には反論も出て緊迫感がある。キリスト教の歴史的な過失や傷も隠さないで語る。それでもクリスチャンとして自分が何を信じているのか、霊的なレベルで語ることが多い。歴史上の人物の発表があると、死生感のやり取りになる。こんなに大教室なのに学生たちは暗記ではないこのような歴史の授業をよく評価してくれる。実践してみて実感するのだが、学生も教師も大教室授業でのこのような対話を楽しむことができているのは奇跡的でさえある。

今年度の学生たちがの発表に取り上げたテーマには、礼拝の歴史、マザーテレサ、死海写本、敵を愛せよ、イエスと女性、聖痕現象、キリスト教の死生観、日蓮とキリスト、祈りとは何か、韓国のキリスト教、日本人と宗教観、クリスマスの歴史、ハロウィン、ノアの洪水、サンタクロース、フランシスコ・ザビエル、聖書の言葉と心理学、キリシタン大名大友宗麟、ジャンヌ・ダルク、キリスト教の教派、黒船来航、マルティン・ルーサー・キング牧師、モーセ、イースター等、ここには載せ切れないほど実に多彩である。自分が知りたいことを自分のスタイルで発表する学生たちは、大勢の前での発表を恐れてはいるが、またよい経験だとして楽しみにしている。

(2)「聖書の世界」

聖書を直接学生が読むことが何よりである。リーディングマップという読むガイドラインを配って旧約では創世記、出エジプト記、新約では福音書や使徒言行録を読んで感想を書いてもらった。以下は2000年度の「聖書の世界C」の一年生たちの声である。

「聖書を読み最初に思ったのは『人間だなあ』ということです。たしかに登場人物の年齢が『百八十二歳』といったようなことは、現実では考えにくいことですが、私が言いたいのは、きれいごとばかりではなく、人間の弱さ、ずるさ、にみくさなどが、

まるで現代のドラマのように描かれていることです。私はこのことを発見してから聖書を読むのが楽しくなりました。」

「自分が今こうして、こんなに大きな紙に自分の意見を書いていることにとても驚いています。今まではなんとなく恥ずかしくて正直に自分の意見を示すことができずにいたけれど、今はそれができる...本当に聖書を読む機会が与えられて良かったです。人に聖書とはこういうもんなんだと教えてもらう受身的な学習よりも、自分で考える学習が大切なんだと感じました。」

「使徒言行録は、今まで読んだ聖書の中で一番わたしには読みづらかった。なぜだろう...パウロは最初イエスを信じていなかった者の一人だったのに、信じるようになってから、イエスを多く広め伝えて行った。何も悪いことはしていないはずなのに、ユダヤ人に捕らえられ、取締りを受けたり、皇帝に上訴したり、少しかわいそうな気もした。彼はそれに対して死ぬことも恐れず、イエスがそうしたのなら従うみたいな感じで感心した。結局最後はどうなったのだろうか？彼の鎖はほどけたのだろうか？ローマでの宣教は成功したのだろうか？パウロは常に真実のもとに我慢をするからえらいと思った。普通、真実が訴えても認められない場合、おとなしくしてられないのではないか？なぜ信じてもらえないのか？とさわぐだろう。真実というのは、自分がまず信じるのが大切なのだということ学んだ気がする。」

今年度は初めて自著『癒しの共同体』⁽³²⁾ 4章「イエスが過ごした最後の週」を使い、少しづつを区切り一人づつ発表し、それを観察者にコメントしてもらっている。著者と読者の対話がこのように成熟した形でできるとは予想してなかった。学生たちがよくチャプレン室に質問にくる。テーマが哲学的で難しいからでもあるが、この授業の成功を裏付ける。

本と聖書を読む上でのガイドラインや、私が用意する関連読み物⁽³³⁾が、学生たちの学ぶ意欲を高め、このクラスでも日を追うにしたがって発表・表現能力が育っている。

(3) 少人数の授業「講読」、そして結論

キリスト教科目ではないが、1年生の講読を受け持ってきた。20人程度の演習形態の授業は学生との対話がより深くできた。まず全員の写真を取り、顔と一致させてファーストネームを覚えるのが、私が自分に課す新学期最初の宿題である。前期は2～5人のグループ討論を取り入れ、私もそのなかに入ってお互いに知り合うことに努める。必然的にいろいろな話題が出てくる。私は大教室でよりもっと自由に語れ、目をまん丸くして教師の私生活について聞く学生との関係の深まりが楽しい。このようなグループ別討論に全体討論を合わせ、毎回書くことを課して表現力を訓練する。後期は全体で20本のビデオ映画のなかから好きなものを自分で10本見ることを宿題とし、ビデオ鑑賞ノートを課題とする。各映画の発表者が「この映画のメッセージは何か」をテーマに発表し、その映画を見た何人かの学生も感想を応答として発言する。映画という芸術のジャンルを利用し、楽しみながら人の生き方を考える。それぞれの違った視点や分析を聞き、それに対する応答も違い、学生も私もよい学びになっている。

映画「もののけ姫」⁽³⁴⁾は日本人の視点からの環境破壊や戦争世界への挑戦としてよい教材だった。主なテーマの自然と人間との共生と並行して、「命を与えもし奪いもするシシ神」の描き方が素晴らしい。鉄を造る「たたら場」の人間が奪ったシシ神の首はアシタカやサンによって取り戻され森が再生するが、「よみがえっても、ここはもうシシ神の森じゃない。シシ神は死んでしまった」と嘆くサンの言葉が世俗化した私たちの世界を映し出す。しかしアシタカが言うように「シシ神は死にはし

ないよ、命そのものだから、生と死を二つとも持っている。私に生きろと言ってくれた」というのがこの映画のメッセージであり、日本の霊性からの呼びかけでもあると思う。

宗教が個別に発展してきた前ミレニアムの古い千年は終わった。宗教の束縛からの解放を求めて発達してきた科学の時代が環境汚染や戦争で行き詰まり、有機的な癒しが新しいミレニアムで切望される。それには規制の宗教文化を超えるものとして、しかし宗教そのものが求めてきたものを実現するものとして、霊性 Spirituality の確立が必要だという気づきがある。シシ神のいなくなった森は各宗教の狭さの死と新しい霊性の時代の始まりを意味しよう。これからは人間が規定する「神」を競って争う宗教戦争ではなく、共に人類が普遍的でもあり個別的でもある「霊性」の実践を模索する宗教間の対話の時代である。心と身体統合が人間であり、人間が自然の一部であることを意識しながら、多民族・多宗教が共に生き分かち合い愛し合う、癒しの時代21世紀は今始まったばかりなのである。

[注]

- (1) 塚田理『日本におけるキリスト教学校』(有限会社リトン 2002年) 10頁と164頁。
- (2) 北星学園大学はチャブレンの任期を4年とし、再任を希望すれば全教職員の選挙によってそれを計っている。
- (3) 1935年にアメリカ合衆国で始まったアルコールクス・アノニマス(AA) は、12のステップという画期的な回復のプリンシプルで、何千万というアルコール依存症者の命を救ってきた。それは二人のアルコール依存症に苦しむクリスチャンが考案したもので、規制の宗教を超える「ハイヤーパワー」(偉大な力)を掲げ、政治的な信条を越えた「自助グループ」という共同体を形成してきた。他のアディクションにも応用されるこの方法論は、新しい時代の教会の霊性だと私は洞察している。

- (4) 教会と国家とがそれぞれ自己に固有の活動領域を守っている限り、相互に干渉してはならないし、国家が特定の宗教に限ってこれに特権や特別の便宜を与えては成らず、いかなる信仰の自由も保障しなければならないという原則。アメリカ合衆国憲法(1789)が最初で、ヨーロッパ諸国に波及し、日本国憲法も第20条でこの原則を採用している。(キリスト教大事典「政教分離」参照)。
- (5) 塚田理, 上掲書48-52頁。
- (6) 私は家族でイスラム教徒であるマレーシアの家族らと娘を通じて親しく交わった。子供たちもラマダン断食を実行していたのに驚いたものだ。私たちキリスト教と彼らイスラム教徒とは互いに異なる信仰を尊重しつつ友人となれることは、ロンドンの学生家族寮に共に住んで確かめた貴重な体験であった。イスラム教自体の学校が将来イギリスにできるかどうか、現在の原理主義のテロ活動がこれを難しくしている。しかし、草の根的な人と人との交わりを止めてはならず、どんなに時間がかかっても結局そのような実践の積み重ねが、将来の宗教間の平和的対話を実現するだろう。
- (7) マタイによる福音書6章33節。
- (8) 全国大学チャプレン会で2000年7月13日、仏教系の花園大学、河野太通学長の講演があった。その宗教教育の実態と課題がキリスト教大学のそれと共通していて驚いた。仏教にも歴史的な精神遺産があり、今もその現代的な解釈と継承が課題である。
- (9) (2002年10月12日北海道新聞) 最近タイのある県から皇太子の長女誕生に象が贈られたが、外国から直接贈り物を受け取れないという規定を宮内庁が出し、日本国民への贈り物となった。皇室は贈り物も受け取れない。
- (10) カトリック中央協議会福音宣教研究室編『歴史から何を学ぶか カトリック教会の戦争協力・神社参拝』(新世社1999年) 30頁。
- (11) 私は1990年に2ヶ月間、アメリカ合衆国のミッション・スクール(宣教会議のようなもの) 2個所に招かれ、日本人クリスチャンとしてセミナー担当、礼拝企画員になるチャンスを得、他に2,3の会議に自主参加した。1992~96年にはChristian Conference of Asia やその関連グループの招きで、インド、フィリピン、韓国をそれぞれ2回ずつ訪問し、発表したりディスカッションに加わったりした。1995年~98年にはサンフランシスコ神学院のコースで、ジュネーブとコスタリカでの半月づつのセミナーを履修した。グアテマラやニカラグアにはコースの仲間と共にスタディーツアーで訪問した。革命で人口のほとんどが抹殺された山岳地区で極貧の家族の家に一晚泊ったこともある。これらの旅を経、振り返るなかで、私のアイデンティティは徐々にまた完全に変えられてきた。
- (12) 新生思想研究所『大学の歴史と理念』(善本社1976年) 3, 4頁。
- (13) 1887年1月15日、スミスが函館から7人の生徒を率いて女学校を開設した。『北星学園女子中学・口頭学校の110年』12頁参照。
- (14) 同掲書7, 8頁。
- (15) リベラル・アーツ liberal arts とは技術の習得ではなく、思考能力の育成である。技術習得は一定の専門領域に限られるが、思考能力自体の発達のためには、多くの領域を総合的に理解する理念そのものに焦点が行く。
- (16) 同掲書17頁。
- (17) 同掲書18頁。
- (18) 同掲書25~28頁。
- (19) クリスチャンたちの戦争責任告白が日本人の歴史観形成を助ける。「第二次大戦下における日本キリスト教団の責任についての告白」(1967年)以来、多くのキリスト教派が戦争協力を懺悔している。1986年に戦争責任の告白をした日本カトリック教会が『歴史から何を学ぶか』(前掲書)のなかで述べる次の言葉は、戦争責任告白の目的を明確にする。「本書は、過去の当事者をなじることを意図

- したものではありません...日本のカトリック教会が戦争に協力するようになっていった歩みを振り返るのは、直接戦争にはかかわらなかった現代のわたしたちが、過去の日本の教会の構造的な責任を担い、悔い改め、改心するためです」(11, 15頁)。
- ⑳ 同掲書178頁以下。
- ㉑ 同掲書14頁。
- ㉒ 同掲書31～40頁にはアメリカ型のリベラル・カレッジが日本の実情にあわず反愛国主義であるとして、キリスト教学校が激しく攻撃され、一切の「宗教教育」が訓令12号において排除されたいきさつが書かれている。
- ㉓ 大木英夫『「宇魂和才」の説 — 21世紀の教育理念』聖学院大学出版会1998年。
- ㉔ 同掲書69頁。
- ㉕ 紀元6世紀、日本に仏教が伝来するまで日本人には文字がなかったから、書かれた歴史はなかった。仏教によって初めて日本人は歴史観という概念を学んだと言える。当時「仏道」と呼ばれていた仏教の体系的な宗教概念から、「神道」という呼び名が生まれ、土着の宗教だと初めて意識したのだ。
- ㉖ このことについては古屋安雄『大学の神学 — 明日の大学を目指して』(ヨルダン社1993年)がプリンストン大学の例をあげ、詳しく論じている。
- ㉗ やっと今年度はじめて4科目に減らしてもらった。2003年度から北星学園大学はチャプレンが授業を持たないことになったので、教員とチャプレン職との二重のプレッシャーはなくなる。しかし、私が文部省から認められていた教員としての専門性が、新チャプレンには否定されることになる。新チャプレンの宗務職員としての専門性を認め、式典での説教の機会などを保証する必要がある。キリスト教大学の大部分がチャプレンを教員にする闘いを歴史的にしているなかで、北星学園大学の選択である「授業を持たないチャプレン」の位置づけが問われよう。学生との接点がどこで取れるか、チャペルの位置付けがこれまで通りでいいのかも今後の課題となろう。授業を持たないチャプレンの出現のプラス面は、教員と職員の間職の専門性への開拓の道が開くことであろう。例えば他にも「心理療法師」の資格を持った専門家である学生相談室の相談員の位置付けへの再考を促そう。2003年度から相談員が専任となる。
- ㉘ 大学が大きくても、部署を切って責任を完全に託し、小規模的にやっていくことができる。これから事務や会議の持ち方や大学の組織のあり方を抜本的に変えて行くのに、寄付と学生数獲得に苦勞してきたアメリカの大学に学ぶことは多いと思う。
- ㉙ マタイによる福音書10章39節。
- ㉚ 短大では年間6回のチャペル出席が義務づけられている。私は4回のチャペル出席で1回の授業出席と読み替え、必修に反発する学生たちに多少の自由を提供している。
- ㉛ FDとは1998年大学審議会答申の『21世紀の大学像』として出てきたもので、教授法の改革を目指す。北星学園大学ではその取り組みを早くからしており、現在の新体制もその線に添う形で出てきている。
- ㉜ 森真弓『癒しの共同体 — バタード・ウィメンの自助グループ』(響文社1999年)
- ㉝ 通年4回にわたって175人全員の名前を頁数にそって当て、各発表者に観察者を当てたガイドラインを書くのはたいへんだった。また各授業ごとにテーマとなるものを、私の側から別の読み物を用意するのも骨が折れた。が、その報いは大きく、学生たちはそれなりに小さな聖書学者・哲学者のように語ることができている。
- ㉞ 宮崎駿監督作品1997年。

[Abstract]

A New Identity for Christian Universities in the Era of Interfaith Dialogue

Mayumi MORI

Looking back the historical struggles of Christian schools in Japan, this paper intends to find a new way to emphasize their Christian identity while being open to interfaith dialogue. The value of teaching Christian subjects in Christian universities in Japan is very important in this respect, because Japanese society has troubles with its fear of religion. The long history of finding a balanced relationship between the state and Christianity may help Japan to overcome its denial of recognizing the Shinto traditions as its religion. This paper also searches for the writer's individual struggle as a Japanese Christian. Sharing such life-long experiences and insights, especially in classes teaching Christian subjects, this paper makes suggestions for a new consciousness of being a Christian University in the Japanese context.